# 保育士養成課程における施設実習に関する課題Ⅱ
## － 現状と約10年前の比較 －

# Challenges Relating to On-site Practicum in the Nursery Teacher Training Course Ⅱ: Comparing the Current Situation with That of about a Decade Ago

（2014年３月31日受理）

土谷由美子　　平尾　太亮
Yumiko Tsuchiya　Taisuke Hirao

Key words：施設実習，意識，比較


## 抄　　録

施設で実習を行う主な目的は，社会的養護の実践の場である各種児童福祉施設において，養成校で学習した理論をもとに施設の役割・支援の実際を実習を通して理解することである。しかし，学生の多くは施設実習への理解が乏しいため，実習前後の施設に対するイメージの変化，実習先での指導内容，約10年前の学生との施設へのイメージの比較の３点を調査した。その結果，実習を通して施設へのイメージが良くなっていることが明らかになった。また，指導内容は利用児･者への関わり方が１番多かったが，指導内容は多岐にわたり，加えてそれを達成するために必要な学内での学習内容も多岐にわたるため，総合的な指導・学習が必要なことが明らかにされた。併せて，現在の学生は，施設に対するイメージが約10年前の学生に比べてよいイメージを持っていることが明らかにされた。


## Ⅰ．問 題 と 目 的

近年の子どもを取り巻くも社会情勢の変化から，保育士の重要性が以前に増して高まっている。

保育士の業務として，児童福祉法総則において，児童福祉の理念，児童の育成の責任，原理の尊重が明示されている。また，児童福祉施設を利用する児童（満18歳に満たない者，障害のある児童）に対して，保育士は「保育士の名称を用いて，専門的知識及び技術を持って，児童の保育及び児童の保護者に対する保育に関する指導を行う者」（児童福祉法第18条４）としており，保育士は児童福祉の基本理念を理解した上で，児童や保護者が心身ともに健やかに育成する責任をおった専門職であるといえる（小倉ら2009）。

しかし，本学科に入学していきた学生の多くは，保育士を保育所保育の役割としてしかとらえておらず，児童福祉施設での施設保育の役割まで理解している学生は少ない。

そこで本研究では，施設実習に望む学生が，施設実習に対してどのような思いを抱き，実習を通してその思いがどのように変化したのかアンケート調査より明らかにする。また，実習先での指導内容を分析し，養成校として今後どのように施設実習に向けての学習・指導内容の一助とする。併せて，平成16年に施設実習に参加した学生のアンケート結果と比較することで，保育学生の施設実習に対する意識の変化を理解する。以上３点を本研究の目的とした。

## Ⅱ．研　究　方　法

１）調査対象は中国短期大学保育学科平成24年度１年生と過年度履修生計120名に記名式アンケートを実施し調査・分析をおこなった。

２）各質問項目に自由記述欄を設け，具体的な内容を記

述してもらった。

3）調査時期は施設実習終了後の平成25年３月にアンケート調査をおこなった。

## Ⅲ. 結 果 と 考 察

1）実習先および社会福祉施設のイメージについて

①　実習先について

施設実習先は表１の通りで，障害者支援施設が26.7％と最も多く，ついで児童養護施設の17.5％である。知的障害者更生施設，知的障害者授産施設，知的障害者通園施設を合わせると，50.8％になり，半数の学生が児童福祉施設ではなく，知的障害者福祉法の定める成人施設で実習していることがわかる。

②　実習前と実習後の社会福祉施設に対するイメージの変化

実習前と実習後の学生の社会福祉施設に対するイメージの変化について質問した。

実習前の社会福祉施設に対するイメージは表2-1の通りで，最も多かったのは「良いイメージ」の57.5％である。次いで多いのが「イメージ通り」と「悪いイメージ」で,同じ20％であった。良いイメージを持っている学生が過半数を占めるが,「イメージ通り」,「悪いイメージ」,「非常に悪いイメージ」を持っている学生を合わせると，40％になる。自由記述では,「閉鎖的なイメージがある」や「暗く怖いイメージがある」と述べる学生もおり，社会福祉施設に対する間違ったイメージや，障害に対する理解の乏しさから不安感が反映された結果と考えられる。

次に，実習後の社会福祉施設に対するイメージは表2-2の通りである。最も多かったのは,「非常によいイメージ」の65％であり,「良いイメージ」と答えた28％を合わせると，93％の学生が，社会福祉施設に対して，ポジティブなイメージを持つようになったことがわかった。これは，実習を通し，利用児・者の生活にふれたことで，イメージが変容したと考えられる。例えば，利用児者の生活状況を問う質問では，施設で生活している利用児・者が生き生きと生活しているかどうかの問いに対し97.5％の学生が,「非常にあてはまる」,「かなりあてはまる」,「だいたいあてはまる」と感じている（表2-3)。その結果，自由記述では「笑顔がたくさん見られた」,「楽しそうに生活されていた」などの意見が見られた。また，92.5％の学生が，施設がアットホームであったと感じており（表2-4)，実習前のイメージで多く見られた，暗く閉鎖的なイメージは，実習を通して180度変化したことがわかった。自由記述でも,「雰囲気が明るくて，とてもアットホームだった」,「入所児・者がいつも笑顔で過ごしやすい環境が整っていた」等の意見が見られた。特に，利用児・者と職員との関係が良いことが，実習先をアットホームであると感じる大きな要因になっており，施設の利用児・者と職員の関係が良好だったと捉えた学生は，97.5％にのぼる（表2-5)。

以上のように，実習を通し，利用児・者や施設職員と実際にふれあうことで，学生自身の理解不足からくるネガティブなイメージがポジティブに変容したことがわかった。

表１　実習先の種別

| | 度　数 | パーセント |
|---|---|---|
| 乳児院 | 4 | 3.3％ |
| 児童養護施設 | 21 | 17.5％ |
| 情緒障害児短期治療施設 | 3 | 2.5％ |
| 知的障害児通園施設 | 6 | 5.0％ |
| 知的障害児施設 | 15 | 12.5％ |
| 肢体不自由児施設 | 2 | 1.7％ |
| 重症心身障害児施設 | 8 | 6.7％ |
| 障害者支援施設 | 32 | 26.7％ |
| 知的障害者更生施設 | 17 | 14.2％ |
| 知的障害者授産施設 | 9 | 7.5％ |
| 障害者通園施設 | 3 | 2.5％ |

表２-１　実習前の施設へのイメージ

| | 度　数 | パーセント |
|---|---|---|
| 非常によいイメージ | 3 | 2.5 |
| よいイメージ | 69 | 57.5 |
| イメージ通り | 24 | 20.0 |
| 悪いイメージ | 24 | 20.0 |
| 非常に悪いイメージ | 0 | 0.0 |

その結果，実習を終えて施設で働きたいと思うようになった学生は，62.5%ととなり，多くの学生が社会福祉施設に魅力を感じるようになったことがわかった（表３）。自由記述でも「利用児・者とのかかわりが楽しく，もっと接してみたいと思った」や「保育所とは違ったやりがいを感じ，施設職員に魅力を感じた」などといった意見が見られた。

表２-２　実習後の施設へのイメージ

| | 度　数 | パーセント |
|---|---|---|
| 非常によいイメージ | 78 | 65.0 |
| よいイメージ | 33 | 27.5 |
| イメージ通り | 8 | 6.7 |
| 悪いイメージ | 1 | 0.8 |
| 非常に悪いイメージ | 0 | 0.0 |

表２-３　施設で生活している利用児・者は生き生きしていた

| | 度　数 | パーセント |
|---|---|---|
| 非常にあてはまる | 51 | 42.5 |
| かなりあてはまる | 48 | 40.0 |
| だいたいあてはまる | 18 | 15.0 |
| あまりあてはまらない | 3 | 2.5 |
| 全くあてはまらない | 0 | 0.0 |

表２-４　施設はアットホームな環境であった

| | 度　数 | パーセント |
|---|---|---|
| 非常にあてはまる | 39 | 32.5 |
| かなりあてはまる | 42 | 35.0 |
| だいたいあてはまる | 30 | 25.0 |
| あまりあてはまらない | 9 | 7.5 |
| 全くあてはまらない | 0 | 0.0 |

表２-５　施設の利用児・者と職員の人間関係は良好であった

| | 度　数 | パーセント |
|---|---|---|
| 非常にあてはまる | 60 | 50.0 |
| かなりあてはまる | 42 | 35.0 |
| だいたいあてはまる | 15 | 12.5 |
| あまりあてはまらない | 3 | 2.5 |
| 全くあてはまらない | 0 | 0.0 |

一方，実習前に比べ，実習後の社会福祉施設に対するイメージが低下した学生もいた。自由記述の内容から，入所児に対する対応が難しく，自分の考えていたような実習ができなかったこと，実習担当者からの指導が厳しく，実習が大変だったことなどが，社会福祉施設に対するイメージが低下した要因となっているようであった。ただし，生活している入所児は生き生きと生活しているように捉え，また，社会福祉施設自体にはアットホームな印象を持っていることから，社会福祉施設へのイメージが低下したというよりも，施設職員として利用児に支援することの難しさを痛感した結果，社会福祉施設へのイメージが低下したと考えられる。

③　実習担当者からの指導内容（複数回答）

実習中に実習担当者からの指導内容は表４の通りである。「利用児・者への関わり方」28.7%，「利用児・者の実態」27.0%，「実習に対する基本的態度」12.3%，「日誌の書き方」12.3%，「施設への現状課題」19.7%であった。障害の特性や支援方法を学内で学んでいるが，実際の利用児・者と学内で学んだ知識が一致せず，知識と技術の統合が難しいことが伺える。障害と一言にいっても特性や状態像は個々により様々である。それらをアセスメントしていく「利用児・者の実態」の理解が難しいため，結果として「利用児・者への関わり方」がうまくできていないと考えられる。

その結果，実習前学内で一番勉強しておけばよかったと思う講義科目は表５のようになった。表１で示したとおり，今回の施設実習では半数の学生が障害者支援施設で実習を行っている。また，利用児・者の実態や利用児・者への関わり方について指導されたことから，障害や支援方法について学ぶ「障害

表３　実習を終えて施設で働きたいと思うようになったか

| | 度　数 | パーセント |
|---|---|---|
| 是非働きたい | 18 | 15.0 |
| 働いてもよい | 57 | 47.5 |
| まだ考えられない | 27 | 22.5 |
| できたら働きたくない | 18 | 15.0 |
| 絶対働きたくない | 0 | 0.0 |

児保育」が40.7 %と一番大きくなっている。続いて，「人間関係」では利用児・者同士のトラブル時の対処方法や，人間関係をどのように広げていくのか知るためとの理由で12.7%の学生が講義名をあげた。養護施設等に関する知識や技能，入所児の心理を学ぶ「社会的養護内容」が11.9% ，発作や疾病など入所児･者の健康に関して学ぶ「子どもの保健」が9.3%。以下，「乳児保育」6.8%，「発達心理学」6.8%，「言葉」5.9%，「音楽基礎演習」2.5%，「保育内容総論」1.7%,「幼児言語」0.8%,「環境」0.8%となっている。この結果から，施設実習とは，障害や利用児・者の心理を学ぶだけではなく，様々な理論や知識が関連し合い，成り立っていることが伺える。

その他にも少数意見ではあるが，料理や，利用児に教えるための算数といった意見もあり，学内での知識だけでなく，総合的な知識が必要となることが伺える。

表４　実習担当者からの指導内容

| | 度　数 | パーセント |
|---|---|---|
| 利用児・者への関わり方 | 105 | 28.7 |
| 利用児・者の実態 | 99 | 27.0 |
| 実習に対する基本的態度 | 45 | 12.3 |
| 日誌の書き方 | 45 | 12.3 |
| 施設への現状課題 | 72 | 19.7 |

表５　実習前学内で一番勉強しておけばよかったと思う講義科目

| | 度　数 | パーセント |
|---|---|---|
| 障害児保育 | 48 | 40.7 |
| 人間関係 | 15 | 12.7 |
| 社会的養護内容 | 14 | 11.9 |
| 子どもの保健 | 11 | 9.3 |
| 乳児保育 | 8 | 6.8 |
| 発達心理学 | 8 | 6.8 |
| 言葉 | 7 | 5.9 |
| 音楽基礎演習 | 3 | 2.5 |
| 保育内容総論 | 2 | 1.7 |
| 幼児言語 | 1 | 0.8 |
| 環境 | 1 | 0.8 |

２）平成16年度学生と平成24年度学生のアンケート結果の比較

①　平成16年度学生と平成24年度学生の社会福祉施設に対するイメージの変化

それでは平成16年度学生と平成24年度学生では，社会福祉施設に対するイメージはどのように違うのだろうか。土谷（2004）の研究によると，平成16年度学生は実習前，社会福祉施設に対して良いイメージを持っている学生は23.9%であり，平成24年度の学生の60.0%にくらべ大幅に低い。一方，社会福祉施設に対して悪いイメージを持っている学生は，平成16年度が21.1%，平成24年度が20.0%と同程度存在していることが分かる（表6-1，図１）。

表６-１　実習前の施設へのイメージ

| | 良いイメージ | どちらともいえない | 悪いイメージ |
|---|---|---|---|
| 平成16年度 | 23.9% | 55.0% | 21.1% |
| 平成24年度 | 60.0% | 20.0% | 20.0% |

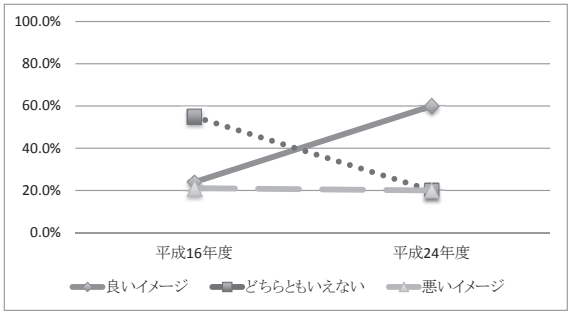


図１　実習前の施設へのイメージ

実習後に社会福祉施設に対して良いイメージを持っている学生は平成16年度の学生は88.9%，平成24年度の学生は92.5%と，どちらも高い値になっている（表6-2，図２）。特に，平成16年度の学生は実習前の社会福祉施設に対しての良いイメージが，65%も上昇している。実習を通して，実習前に感じていた不安感や，社会福祉施設に対する価値観が変容した結果であると考える。

ただし，実習後，施設で働いてみたいかとの問いに対しては，平成16年度の学生で，施設で働きたいと答えた学生は27.2%と少ない。一方，平成24年度の学生は62.5%と平成24年度の学生の方が割合は大

きい（表6-3，図３）。

これは，平成16年度の学生は児童福祉施設での実習を通し，イメージが変容はしたが，就職に関しては以前から思い描いていた，保育所保育士への思いが強く現れた結果といえるのではないだろうか。裏を返せば，平成24年度の学生は本学に入学し保育者としての夢はあるものの具体的な保育者像までは作ることができていないために，実習を経験する中で思いが変容すると考えられる。養成校として，学生に具体的な保育者像を描くことができる支援が今後は必要になってくると考える。

表６-２　実習後の施設へのイメージ

| | 良いイメージ | どちらともいえない | 悪いイメージ |
|---|---|---|---|
| 平成16年度 | 88.9% | 8.9% | 2.2% |
| 平成24年度 | 92.5% | 6.7% | 0.8% |

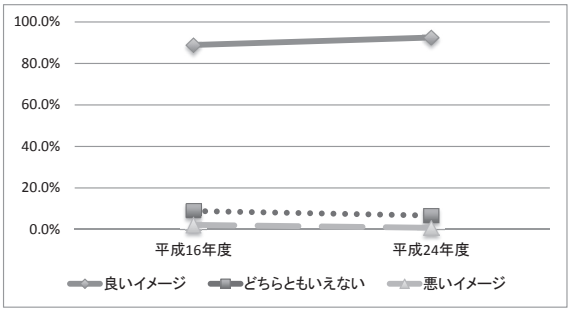


図２　実習後の施設へのイメージ

表６-３　実習を終えて施設で働きたいと思うようになったか

| | 働きたい | どちらともいえない | 働きたくない |
|---|---|---|---|
| 平成16年度 | 27.2% | 56.7% | 16.1% |
| 平成24年度 | 62.5% | 22.5% | 15.0% |

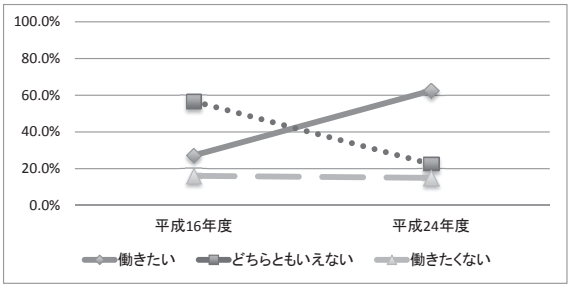


図３　実習を終えて、施設で働きたいと思うようになったか

## Ⅳ．お　わ　り　に

今回のアンケート結果から，施設実習に向かう学生の気持ちの変化について明らかにすることができた。多くの学生が,以前に比べ,社会福祉施設に対して良いイメージを持っていることが明らかになった。様々な子どもの変化から，学生自身が経験してきた部分が影響しているものと考えられる。また，本学科で夏休みに取り組んでいる社会福祉施設でのボランティア経験も大きな影響を及ぼしていると考える。ボランティアから帰ってきた多くの学生が，社会福祉施設に良い印象を持つようになっており，ボランティアを通して学生自身の持つイメージが変容したと考えられる。

一方，施設実習前に学生が学んでおきたい内容も明らかになった。障害に対する理解はもちろんのこと，疾病に関する知識,入所児の心を理解する知識,コミュニケーションに関する知識，レクリエーションや音楽の知識とその分野は多岐にわたる。

今後の課題として，これら必要となる知識を，どのように学生に定着させ，実践時に使える知識とするかであろう。知識だけではなく，体験を通して，技術を学んでいくことが，実践力のある保育者を養成するために，必要なことになるのではなかろうか。

## Ⅴ．参　考　文　献

・小倉毅・土谷由美子　2009　保育士養成課程における施設実習に関する課題　中国学園紀要第８号pp．77～87
・岡本幹彦他編集2013　福祉施設実習ハンドバック　みらい
・小野澤昇・田中利則編著者2011　福祉施設実習ハンドバック　ミネルヴァ書房
・土谷由美子　2004　施設実習に関する意欲と現状について－学生のアンケートを中心に－　中国学園紀要第３号
・土谷由美子　2005　施設実習に関する意欲と現状についてⅡ－学生のアンケートを中心に－　中国学園紀要第４号